

包括脳シンポジウム「脳科学分野で博士課程進学をいかに増やすか／脳科学の将来像」のご報告

北海道大学医学研究科 田中真樹

群馬大学の平井先生のご提案による標記シンポジウムに参加しました。これは昨年の玉川大学の星先生（現・東京都医学研）の「キャリアパスを考える」シンポジウムを引き継いだもので、今回は昨今のポストク事情に詳しい病理医の榎木英介先生の講演に引き続き、3名のPIと3名の大学院生・若手研究者が発表を行い、それらを受ける形で意見交換が行われました。当初は30～40名程度の参加でしたが、終盤には立ち見が出る盛況ぶりとなりました。

シンポジウムに先立って、社会問題化しているポストクの就職難やその解決策について議論するのは問題が大き過ぎるので、まずは本音で話し合っ世代間の認識の違いを分かり合うのが会の目的であるとの趣旨説明が提案者からなされました。その後、開会の挨拶に立たれた木村先生からは、ご自身が大学院生だった70年代の研究状況の説明とともに、学位をとったらすぐに助手、ポストが無ければ海外で武者修行といった従来のキャリアパスが、現在では多くの場合当てはまらないとの指摘がありました。

最初の発表者の榎木先生は、多くのデータを提示してポストクの現状を説明されました。ポストクの就職難が社会問題となって久しく、身近に多くのポストクがいることは確かですが、全国状況を正確な数値で理解している研究者は少ないように思われ、約1万8千人のポストクの4割が生命科学系であること、1割以上が40歳代であること、96年以降は教員の新規採用数を上回るポストクが毎年生み出されていることなどがたて続けに示され、会場内は一気にため息交じりの重苦しい雰囲気になりました。また、修士課程学生へのアンケート調査によると、指導教員に就職相談をしたことのある学生の割合はたったの2割ということで、この問題に対する一教員の無力さを学生の側もよく理解していることが示されました。極めつけは、「もし修士学生から相談を受けることがあれば、自分は絶対に博士課程進学は勧めない」との講演者の一言で、確かに全国状況をみると、研究者への道はかつてないほど狭く厳しくなっており、研究職以外への転向が比較的容易な医歯薬学部などの卒業生は別として、むやみに博士課程への進学を勧めることができる状況ではないように思われました。

しかし、こうした厳しい状況であっても研究者を志す若者は確かに存在し、続く3名のPIの発表では、彼らをどのように導くかといったことに主に焦点が当てられていました。東大の河崎先生からは、大学院生には学部生とは違う社会人としての自覚を持たせ、到達目標を設定して自己成長を実感させるなど、研究者を育てる上でのいくつかの具体的な方策についての話があり、生理研の吉村先生からは、教員数の減少によって女性研究者のライフイベントに対応できる余地が少なくなっており、今後、女性研究者を増やすためには、夫婦同時採用制度の導入なども必要ではないかといった提言がありました。また、富山大の井ノ口先生は、ご自身の学生時代を紹介しつつ、今の脳科学をこれからガリレオやニュートンが出現する17世紀の物理学にたとえ、若者に脳科学の魅力と可能性をアピールしていると話されていました。

続くセッションでは大学院生と若手研究者による発表があり、一人目の福岡氏（北大・修士）はASCONEなどでの交流を通じて行ったアンケートなどをもとに、博士課程進学者を増やすことに多くの学生は否定的であることを報告し、二人目の松井氏（東北大・修士）は、大学院を狭き門にして、卒後のポストについてもある程度の保障がされる制度を提案していました。これについてはフロアからトップダウン的に学生を選別して競争を排除することに疑問の声が上がりましたが、その方法はともかく、現状を考えると二人の学生が指摘するように、今後は博士の量を減らして質を高める方向に向かうのは必然の流れであろうと思われました。そこで問題になるのは教員・学生の比率ですが、研究と教育の質を高め、また、研究職を確保するためには、その見直しが図られる必要があると考えられます。最後に演台に立った土谷氏（理研）は、大学教員のリストラと研究・教育の職名による分離、大学院生の授業料の無料化など、これまで日本の大学人が繰り返し話題にして

きた問題について改めて熱く主張をされ、実現への具体的な道筋を示すには至らなかったものの、多くの部分で参加者の共感を集めていたように感じました。

日本人科学者の活躍が日常的に報道され、小学生が夢見る職業で研究者が上位にランクされる今の日本で、研究の重要な担い手であるポストドクと博士課程院生が将来に大きな不安を抱き、それを見た修士や学部の学生が研究者の道から遠ざかろうとする現状は大変残念なことです。自ら海外に頭脳流出するという単純で消極的な解決策ではなく、これからの日本の大学のあるべき姿をそれぞれの立場で考え、それを理解し合うことは大切な第一歩であるとシンポジウムに出て再認識することができました。

(2047 字)